

〈新刊紹介〉

伊澤宏毅著: **カイガラムシ おもしろ生態とかしこい防ぎ方** A5 判, 121 頁, ¥1,571+税 (社団法人農山魚村文化協会, 2006 年 8 月 20 日刊)

カイガラムシのいい本が出た。本書は農文協で出版されている「シリーズ・おもしろ生態とかしこい防ぎ方」の一冊である。このシリーズは重要な農業害虫を中心に出版されており、カイガラムシについてもぜひ出して欲しいと思っていた。

カイガラムシ類は農業上あるいは植物防疫上重要な害虫を多数含んでいるにもかかわらず、その研究者の数は少ない。また、大部分は微小な種で目立たないし、派手な美麗種がいるわけでもない。アマチュアの昆虫研究者にとっても魅力的な対象ではない。さらに、正確な種名を特定するにはプレパラート標本による精査が必要であることも、研究対象として人気がない原因であろう。

しかし、少し我慢してカイガラムシを勉強すると、非常に面白い昆虫であることに気づく。美麗種はいないが、体表のワックスの形態にはさまざまなバリエーションがあり、その多様性には驚かされる。成虫になった後でも体長や外見が変化する変な虫であり、雄と雌の形態がこれだけ違う昆虫も珍しいだろう。寄主植物に高度に特殊化したホストレースと呼ばれるさまざまな系統がみられ、種分化や種内変異の研究対象としても面白いと思う。カイガラムシはわりと身近な昆虫であり、都市の公園でも多くの種を採集できる。また、カシ、シイ類の枝や幹に寄生するオオワラジカイガラムシは、卵が樹皮の割れ目や落葉下で夏を越し、12 月頃ふ化幼虫が家屋内へ侵入して騒動になるという。カイガラムシは家屋害虫になる場合もあるのだ。

このようなカイガラムシの面白さに触れるためには、初心者も読める入門書の出版が望まれる。これまで、カイガラムシの専門書としては「日本原色カイガラムシ図鑑」(河合省三著, 全国農村教育協会, 1980) が知られていた。この本はカイガラムシ研究のバイブルとして素晴らしい本であるが、現在は絶版になっており手軽に入手できない(復刻して欲しい!)。したがってカイガラムシを

詳しく勉強しようとしてもいい本がなかったのである。今回紹介する本は待望の入門書であり実用書といえるだろう。

本書は 3 部 (I~III) から構成されている。I. 暗躍する大害虫カイガラムシでは、果樹、チャ、花き、花木、樹木、施設野菜の害虫として、コナカイガラムシ類が紹介され、カイガラムシの甘露から発生するすす病、カイガラムシとこうやく病菌の共生関係、植物ウイルスの伝播について述べられている。また、雌成虫や幼虫の外観で主要なカイガラムシの 12 タイプを見分けるポイントがわかりやすく説明され、この部分は初心者がカイガラムシを見分ける際にとっても役立つだろう。

II. カイガラムシの動かぬ強み、動けぬ苦勞では、カイガラムシ類の種数や系統関係、天然染料やロウ物質としての利用、基本的な生態の特徴について知ることができる。また、実際の現場で見られるカイガラムシとよく似た害虫や天敵についても写真で紹介されており、非常に親切である。表 6 には、カイガラムシ類の各発育段階における脚の有無と歩行の可否が示されている。ここでマルカイガラムシ科のふ化幼虫の歩行が不可と記されているが、歩行可の誤りではないかと思う。本書に紹介されているマルカイガラムシ科のクワシロカイガラムシでも、ふ化幼虫は歩行可能である。

III. カイガラムシのかしこい防ぎ方では、カイガラムシ防除について具体的な方法が述べられている。大事なことは、防除適期を把握することであり、そのためにカイガラムシの種ごとにふ化時期や越冬生態を理解して、効果的な農薬散布をすることが薦められている。ここは実際のカイガラムシ防除のため重要な情報を含んでおり、実用書としての本書の価値が最も発揮される部分である。

本書は、これからカイガラムシを研究する学生の入門書として、カイガラムシを知りたい研究者、カイガラムシを防除したい農家の方々の実用書として推薦したい一冊である。(宮ノ下 明大)